令和４年度６月の読書会のテーマ

「喪失感情を感じてみる」

目的：子どもたちの喪失感情を芸術を通して（想像して）理解を深める

二人のアーティストの作品から理解する

〇一人目：エドヴァルド・ムンク（1863 年～1944 年）ノルウエーの画家で『叫び』の作者として有名です。

5 歳の時にお母さんを病気で亡くし、15 歳の時にお姉さんが亡くなっています。お母さんが亡くなった後、お母さんの妹に世話をされています。

きょうだいは、長女、ムンクさん、次男、二女、三女と 5 人きょうだいでした。ムンクさんにとってお母さんが亡くなった後、お姉さんがムンクさんに愛情を注いでくれた存在だったので、お姉さんが亡くなったのは相当なショック、トラウマとなりました。二人とも同じ病気である結核で亡くなりました。

ムンクさんにとって最愛のお母さんとその死後、お母さんの代わりとして愛情を注いでくれたお姉さんが亡くなったことは彼の人生で一生影響を及ぼすような喪失体験となりました。

画家となってからその影響がムンクさんの作品に色濃く反映されていきます。

彼が描く作品はどれも喪失体験が滲み出る暗い作品が圧倒的に多くあります。

『病める子』『少女と死』『不安』『吸血鬼』そして『叫び』という作品です。

5 歳の時と 15 歳の時、2 度にわたって最愛の人を亡くした経験は一生を通じて影響を与えていきます。

45 歳の時に喪失体験の後遺症であるアルコール依存症を治すため自発的に 7 ヶ月間、精神病院に入院する程でした。

ムンクさんは画家として初期の時代から激しい非難を受けていました。個展を 1 週間で芸術家協会の理事たちによって打ち切られたこともありました。

画家として初期には酷評されたムンクさんでしたが、２０世紀初頭になると、表現主義の画家たちからゴッホさん、ゴーギャンさんに並んで熱狂的に支持されるようになりました。

その後も 81 歳の生涯を閉じるまで、ノルウエーでは世界的有名な画家として評価されていきました。

彼の死後、2020 年 6 月には一人の画家としては世界最大級と言われる 13 階建ての美術館ができた程です。

ムンクさんの家では、お母さんが亡くなってからそのショックで医者だったお父さんは精神的バランスを失い、狂信的なクリスチャンとなり、子どもたちにとても厳しく接していました。そんな厳格なお父さんが夜中に寝室で跪いて祈っている姿を、ある晩、偶然見てムンクさんはとても衝撃を受けました。

その後、医者になった次男が肺炎で亡くなり、次女は喪失体験の影響で大人になっ

てから精神のバランスを崩し精神病院に入院しています。

最も大切な人として愛していたからこそ、失った時のショックも大きく、一生を通じてその精神的ショックが人生に色濃く影を遺したのでした。

○二人目：ジョン・レノン

（1940年～1980年）イギリス出身のロックミュージシャンです。ザ・ビートルズは未だに世界的に最も知られたバンドです。

彼の父は船乗りで、ジョン・レノンさんが生まれた時には航海中で不在でした。

ジョン・レノンさんを産んだ後、お母さんは他の男性と同棲中だったため、お母さんのお姉さんである子どもがいなかったミミ伯母さん夫婦に育てられています。

ジョン・レノンさんが5歳の時、お父さんが帰国し、ミミ伯母さんの元からジョン・レノンさんを引き取ろうとします。

お父さんとお母さんが喧嘩となり、二人はどちらに引き取られたいか、幼いジョン・レノンさんに迫りました。

ジョン・レノンさんはお父さんを選びましたが、お母さんが怒りまくり、結局、お母さんが引き取ることになりました。

しかしお父さんからジョン・レノンさんを奪い取るかのように引き取ったばかりのお母さんは、ミミ伯母さんに再び預けジョン・レノンさんの元から去ってしまいます。

お父さんはその後、家出をした後、行方知れずになりました。

お母さんは自由奔放な人で、ジョン・レノンさんにギターを教えたりもしました。

ジョン・レノンさんが15歳の時、ミミ伯母さん宅を訪れたその帰りに、非番の警察官が運転する車にお母さんが跳ねられ亡くなるという痛ましい事故が起きました。

突然の喪失体験にジョン・レノンさんは相当精神的なダメージを受けました。

ビートルズの相棒であるポール・マッカートニーさんも同じ頃、お母さんを癌で亡くし境遇が似ている二人は慰め合い友情を固める仲となりました。

ジョン・レノンさんは、ポール・マッカートニーさん、ジョージ・ハリソンさん、リンゴ・スターさんとバンドを組み、爆発的なヒットを連発する世界中で愛されるバンドになっていきました。

彼らが影響を受けたのは、アメリカで人種差別されていた黒人音楽です。リンカーン大統領によって奴隷解放された後も、黒人は根強い差別をアメリカで受け続けていました。

彼らが生み出す音楽は、古い世代の白人至上主義の人たちの音楽にはない、疎外感と鬱屈感もありながら生き生きとした躍動するリズムと現実感がある歌詞が若い白人たちの心を捉えた魅力的な音楽でした。

それらの黒人音楽に影響を受けたビートルズは、コピー演奏を続け、その後、作詞作曲をするようになりました。

ジョンさんはビートルズ時代、シンシアさんと結婚し、ジュリアン・レノンという男の子が生まれます。

ジョンさんのお母さんの名前が、ジュリアという名前でした。

ただその後、オノ・ヨーコさんという日本人の前衛芸術家に彼女の個展で出会い二人は恋に落ち、シンシアさんと離婚してしまいます。

その時、まだ小さな子どもだったジュリアンさんを慰めるためにポール・マッカートニーさんが作った曲が『ヘイ・ジュード』という名曲でした。

オノ・ヨーコさんとの仲が深まる中で、ビートルズを解散することになります。

その当時、ジョン・レノンさんは原初療法という精神療法を受けます。

その後に出したアルバムが『ジョンの魂』というアルバムでした。

子ども時代の喪失体験をもとに喪失感情を赤裸々に歌った曲が『マザー』という曲でした。

その後、ジョン・レノンさんの女性問題に愛想をつかしたオノ・ヨーコさんが距離をとり、ジョン・レノンさんはミュージシャン仲間とその喪失体験で乱痴気生活を送ります。

その後、なんとかオノ・ヨーコさんと復縁し、オノ・ヨーコさんとの間にショーン・レノンという男の子が生まれます。

ショーンくんが生まれるとジョン・レノンさんは音楽活動を辞めて、ショーンくんの子育てに没頭します。

子育てに没頭したのは、ジョン・レノンさんがお父さんとお母さんの愛情に恵まれなかった自らの子ども時代を癒す為の代替行為のようでした。

愛と平和を訴えたジョン・レノンさんでしたが、成人したショーン・レノンさんによれば、イライラしたり不機嫌な様子のジョン・レノンさんのことも覚えているとのことでした。

ショーンくんが 5 歳の時にテレビにお父さんの演奏映像が流れると、「お父さんはビートルズだったの？」と聞かれ音楽活動に戻ることにしました。

音楽活動に戻りアルバムを発売した後、熱狂的なファンから 4 発の銃弾を背後から受け亡くなりました。

〇二人の喪失体験と喪失感情の共通点

ムンクさんもジョンさんも二度の喪失体験を経験しています。

ムンクさんは最愛のお母さんが結核で亡くした 5 歳の時と、母亡きあとお母さんがわりだったお姉さんを同じく結核で亡くした 15 歳の時です。

ジョンさんは 5 歳の時、お父さんとお母さんにどちらに引き取られたいか迫られ、一度はお父さんを選びますが、怒り出したお母さんを気にしてお母さんを選び直しますが、結局は再びミミ伯母さんに預けられたことが一度目の喪失体験となりました。

そして二度目は 15 歳の時にジョンさんに会った後、別れた直後に交通事故でお母さんを亡くしています。

ムンクさんは喪失体験のトラウマの影響でアルコール依存症となり自ら精神病院に入院して治療を受けます。

ジョンさんも喪失体験のトラウマの治療のため原初療法という精神療法を自らの選択で受けています。

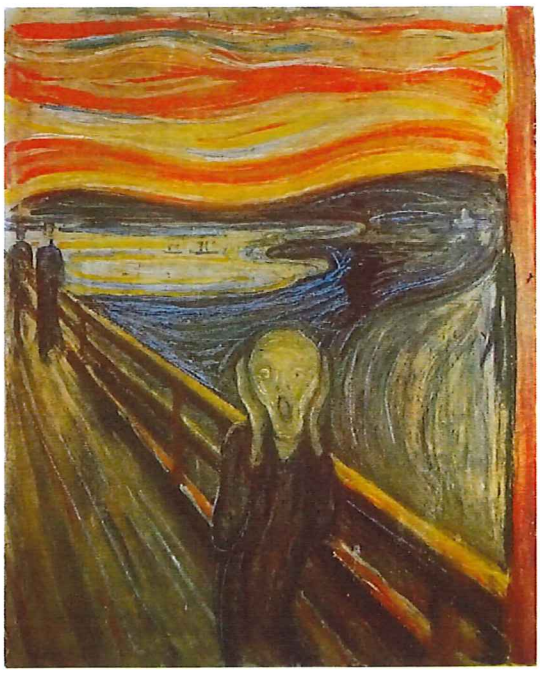
○喪失感情を味わってみる

大切な人を突然失う喪失体験がない人にはなかなか喪失感情を理解することは難しいことです。

二人の作品から喪失感情を味わってみたいと思います。

・ムンクさんの『叫び』

まさしく喪失体験から不安に追い悩まされる「魂の叫び」が表現されています。



当時は賛否両論を浴びた絵ですが今では誰も知っている有名な絵です。

・ジョンさんの『マザー』という歌

（できればジョンさんの悲痛な歌声をYoutube 等でご視聴いただくとジョンさんの喪失感情が伝わりやすいです）

『（ゴーン、ゴーンと暗くて重い鐘の音）

母さん、あんたは僕を授かった
だけど、あんたは一度も僕のものでななかった

母さん、僕はあんたが欲しかった
だけど、あんたは僕を本当に欲しくはなかった

だから僕はあんたに伝えるよ
「さようなら」

父さん、あんたは僕を残して去っていった
だけど僕は決してあんたを残したりはしなかった

僕はあんたが必要だったけど。
あんたは僕を必要じゃなかった

だから僕はただただ伝えるよ
「さようなら」

子どもたちよ、僕がしてきたことをしないでおくれ
僕は歩くこともできなかったのに走ろうとしていたんだ

だから僕はただただ伝えるよ
「さようなら」

母さん、行かないで
父さん、帰ってきてよ

母さん、行かないで
父さん、戻ってきてよ

母さん、行かないでくれよ
父さん、戻ってきてくれよ

母さん、行かないでよ
父さん、戻ってきてよ~~~

（絶叫・・・）」（日本語訳：筆者）

この曲はあまりに暗すぎて、発売当時、ラジオで放送禁止になっています。

ジョンさんは、ビートルズ時代に
「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」という曲を作っています。
「君が必要なのは愛、愛こそすべてなんだ」という歌詞をリフレインしている曲です。
　ある意味、ジョンさんの生い立ちを想うと、一番愛が必要だったのはジョンさん自身だったのかもしれません。

○喪失体験は体験しないとわからない？
　最も大切な人を失う体験は実際に体験しないとわかりにくいものです。
　学園の子どもたちの中にも喪失体験を味わっている子どもたちは多くいます。しかし子どもなので適切な表現手段を持っていなくてムンクさんやジョンさんのようにリアルば感情表現はなかなかできません。

　もしかしたら不適切な言葉や行為で蠢く「魂の叫び」を表現しているのかも知れません。
　卒園生の中には、引きこもったり、異性やお酒や薬やギャンブルに依存したりなど、苦しみの中にいる人たちもいます。
　不適切な行動をしていてもそれが「魂の叫び」なのかどうかも、傍から見ると見当もつきません。

　恐らく我々が喪失体験として一番近いのは、雷の打たれたような激しい恋に落ちて、死にたくなるほど辛い失恋をした時に似たような気持ちになるのかもしれません。
　結局、言葉で表現できない子どもたちの声なき叫びを感じることができるのは、我々の中の豊かな想像力だけが手がかりなのかもしれません。

　最後にジョンさんの愛と平和の祈りを込めて歌ったジョンさんの最も有名な代表曲となっている『イマジン』の歌詞を引用して終わります。
　『イマジン』（愛と平和の祈りの歌）という曲は生涯、自身の孤独な喪失感情に苦しめられたジョンさん自身の世界との一体感の渇望だと解釈できるかも知れません。

（ジョン・レノンさんはなくなる前はアメリカで生活し、FBI にマークされていました、『イマジン』は戦争が起きるたびに放送禁止になってきた曲です）

「想像してごらん　天国なんてないと
　やってみれば簡単でしょ
　地面の下には地獄なんてないし
　僕らの上には空があるだけ
　想像してごらん　すべての人たちが
　ただ今日を生きているだけだと

想像してごらん　国なんてないと
そんな難しいことじゃないよ
殺したり死んだりする理由もないし
宗教もないし
想像してごらん　すべての人たちが
ただ平和に生活していることを

僕のことを夢見人と言うかも知れないけど
ぼくはひとりぼっちじゃないんだ
きみもぼくたちの仲間に加わる日がいつかきて
世界はひとつになる時がくることを願っているんだ

想像してごらん　何も所有せず
きみもできるって思うんだ
欲張りになったり空腹になることも必要ない
人はみんなつながっているんだ
想像してごらん　人々が世界を分かち合っていることを

僕のことを夢見人と言うかも知れないけど
ぼくはひとりぼっちじゃないんだ
きみもぼくたちの仲間に加わる日がいつかきて
世界はひとつになる時がくることを願っているんだ」（日本語訳：筆者）

（最後までお読みいただき有難うございました）